



Title	小説の対訳データから見る日英語可能表現の比較
Author(s)	今泉, 智子
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 27: 33-51
Issue Date	2018-09-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71721
Type	bulletin (article)
File Information	033-052_imaizumi.pdf



[Instructions for use](#)

小説の対訳データから見る 日英語可能表現の比較

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

今泉 智子

A Study on Expressions of Possibility and the Related Meanings in Japanese and English through the comparison of parallel text data from novels

IMAIZUMI Satoko

abstract

The purpose of this study is to find out how Japanese and English perceive the concept of "possibility" and its related meanings, through the comparison of parallel texts collected from novels and their translations in the two languages.

The data is collected from two novels; one is a Japanese novel and its translation in English, the other is an English novel and its translation in Japanese. Target forms are Japanese "-(r)areru", "-eru", "-dekiru", "kotogadekiru" and English "can" and "could". From the data, 743 parallel clauses in which the target forms were used were collected. Observations on the collected examples in each language revealed that Japanese perceives possibility as stative rather than dynamic and tends to express it as a description of a state of a situation. On the other hand, possibility in English is essentially "unreal" and perceived as conditional. These tendencies are related to the fact that Japanese prefers subjective construal whereas English prefers objective construal.

1 はじめに

本稿は日本語と英語の可能表現について、小説の原作とその翻訳における言語形式の対応を観察することを通して、それぞれの言語による「可能」の概念の捉え方の違いに焦点を当て、「可能」という概念がどのような側面を持っているのかを考察するものである。

英語において可能の意味は助動詞“can”、“could”によって表され、モダリティとして研究されてきた。一方、日本語学におけるモダリティは一般的に主観性を表す文末形式を対象とし、「～られる」のような可能表現は、モダリティとしては扱われず、ヴォイスを表す形式として論じられてきた。モダリティは命題に対する話し手の評価や心的態度を表す意味的カテゴリーであるのに対し、ヴォイスは文法関係を表す統語的カテゴリーである。同じ意味を表す形式が、なぜこのように全く異なる文法カテゴリーにおいて論じられるのだろうか。話し手が日本語話者であっても、英語話者であっても、表そうとする「意味」は同じである。しかし、その使用する言語によって、可能の概念のどの部分に注目し、どのように表すかが異なるということは、そこに言語による捉え方の違いが大きく関わっていると考えられる。

そこで、本稿は、モダリティ、ヴォイスといった特定の文法カテゴリーに基づいて可能表現を定義するのではなく、日本語と英語の可能表現形式を直接比較することで、二言語の捉え方の違いを考察する。本稿ではケーススタディとして、日英それぞれの言語を原作とする小説とその翻訳のテキストデータから、日英語の可能概念の捉え方を解明する手がかりを提供することを目的とする。考察では、言語に反映される「捉え方」に注目する認知言語学的アプローチをとり、各言語の「ものの見方」という観点からの説明を試みる。

2 可能とは

「～できる」といった「可能」の意味は、人間だけではなく生物が環境の中で生きていく上で重要な情報である。したがって、言語や文化的背景を問わず、普遍的、基本的なものであると思われるが、同時に定義が難しい概念でもある。青木（1980：170）は「可能とは、動作主体がある動作を、実現する力を有すること、又、ある状態になる見込みがあることである」と定義している。「動作主がある動作を実現する力を有すること」とは、動作主の内部に存在する条件に関わるもの（能力）であり、「ある状態になる見込みがあること」とは、動作主の外部に存在する条件によって何らかの出来事が起こる可能性がある場合（状況可能）や、話し手が何らかの出来事の生起の可能性

があると判断した場合（認識的可能）を含む。本稿で「可能」といった場合、これらを含む意味の総体を指すこととする。

例えば英語の助動詞“can”は、「能力」「状況可能」「認識可能」の意味を表すが、このように一つの形式が関連する二つ以上の意味を持つことは「多義性」とよばれ、あらゆる言語において観察される。つまり、ある言語において、複数の異なる意味が同一の形式で表されるということは、その言語において、それらの意味同士に関連性が見いだされているということである。実体を持ち、観察可能である言語形式に対し、意味というものは、実体がなく、直接観察することができない。そこで本稿では、「形式」の観察を通して、「意味」の分析を行うアプローチをとる。具体的には、日本語と英語における可能表現の多義関係、つまり、各言語が「可能」と関わりのある複数の意味のうち、どこまでを同一の形式で表し、同じものとして捉えているかを、言語形式の観察を通して類推し、そこから「可能」という概念がどのような特徴を持つのかを検討する。

3 先行研究

本節では、日英語の可能表現が先行研究においてどのように論じられているかを概観し、その違いと共通点を整理する。特に、先に述べた可能表現の多義性を明らかにするため、文法化という観点から、可能表現がどのような意味変化を遂げ、どのような多義構造を持っているかを中心に見ていく。

3.1 日本語の可能表現

- ▶1 “-areru”は五段活用の動詞“-rare-ru”は五段活用以外の動詞につく。
- ▶2 動詞の語幹につく助動詞はローマ字で、それ以外はひらがなで表記した。
- ▶3 “られる”、“える”を異形態とみなす考え方もあるが、渋谷（1993）では、“られる”と可能動詞が別起源であることを史的調査から主張しており、本稿もこの立場に賛成する。ただし、「見える、聞こえる」については「見る、見られる」「聞く、聞ける、聞かれる」という形が存在するため、単独の語彙として扱うことにする。

日本語で可能を表す形式には“られる（動詞語幹+“(r)areru”）”¹（例：食べられる）、“える（動詞語幹+“-eru”）”（例：行ける）、“できる（動詞語幹+“-dekiru”）”（例：勉強できる）、“ことができる”²（例：勉強することができる）等がある。“える”は可能動詞とも呼ばれるが、本稿では単独の語彙としてではなく、動詞語幹+“-eru”として分析する³。

これらのうち“られる”は、可能だけではなく受身、自発、尊敬の用法を持ち、ヴォイスを表す要素とされている。日本語記述文法研究会（2009：207）はヴォイスを「事態の成立に関わる人や物を表す名詞が、どのような形態的なタイプの動詞とともに、どのような格によって表現されるかに関わる文法カテゴリー」と定義し、中心的なヴォイス構文として受身文と使役文、関連構文として可能構文、自発構文、相互構文、再帰構文を挙げている。受身文では（1a）のように、能動文においてヲ格で表示される動作の対象がガ格で表示され（「子どもが」）、文の第一の焦点となる。（1b）の可能構文は、「佐藤」という主語を、動作の主体としてではなく、能力の持ち主として描きだすものである。可能構文でも受身文と同様に、能動文ではヲ格で表示される「英語」が、ガ格で表示されている。また自発構文（1c）においても動詞「思

う」の対象である「ふるさと」がガ格で表示されている。

- (1) a. 子どもが勇敢な若者に助けられた。 (←勇敢な若者が子どもを助けた。)【受身】
 - b. 佐藤は英語がすらすら読める。 (←佐藤が英語を読む。)【可能】
 - c. (私は) ふるさとが懐かしく思い出される。 (←私がふるさとを思い出す。)【自発】
- (日本語記述文法研究会2009：210-212)
- d. 先生が本を読まれる。【尊敬】

尊敬用法に関しては、(1d) のように能動文と同様の格表示になるため、ヴォイス構文としては取り上げられていないが、動作主を背景化するという特徴が丁寧さに関わると考えられる。Shibatani (1985) は、これらの“られる”の用法について、動作の対象がガ格として示され、動作主が省略されるか、または二格などに降格することから、“Agent defocusing”という共通の特徴があると論じている。

可能の意味は、渋谷 (2005：33) によると、まず、動作の実現が含意されているか否かによって、「潜在可能」と「実現可能」に分けられる。前者は行為の実現の可・不可について、その行為を行う力や条件がそろっているかどうかだけを述べるもので、動作の発動は確実に行われるものとしては予定されていない (例：今日は泳げるよ。泳いで見せようか)。一方、後者は、動作の発動が予定されているか実際に発動されているものである (例：今日はじめて100メートル泳げた)。

さらに、動作が可能・不可能となる条件を基準として (2) のように分類している。

- (2) 心情可能：主体内部に永続する心情的・性格的条件
- 能力可能：主体内部にほぼ永続的に存在する能力的な条件
- 内的条件可能：主体内部の一時的な条件
- 外的条件可能 (=状況可能)：主体外部の条件 (渋谷2005：34)

渋谷 (1993, 2005) によると、日本語では可能の内部で意味変化が進む場合「状況可能→能力可能→心情可能」という流れが一般的で、認識的モダリティへの変化は一般的ではない。

中井・呂 (2014) では、「このきのこは食べられる」のように、事物の内的条件が動作実現の決定的要因であり、動作主体の意思によって制御できないものを「属性可能」として分類を立て、更に「～得る」によって表される話し手の判断も可能表現に含め、(3) のような四分類を提示している。

- (3) 能力可能：ある動作または状態を実現する能力が主体にあるか否か
- 条件可能：主体の能力の有無ではなく、何らかの条件により主体の動作・状態の実現が可能か否か、あるいはその条件自体の有無

属性可能：事物の属性や状態が実現可能かどうか

認識可能：事柄の成立が可能か否かという認識上の可能性の有無

中井・呂 (2014) によると、能力可能、条件可能は主体が有情物であり、その意志によってコントロールできるのに対し、属性可能における属性の持ち主は、基本的には非情物か、有情物であってもその動作を意志的にコントロールすることはできない。また、認識可能は話者が事柄の発生に対して行う判断であるため、動作主体の意志に関わらないと述べている。

3.2 英語の可能表現

英語をはじめとする印欧語族の言語では、可能表現はモダリティに属する。モダリティの定義や分類には多くの先行研究があるが、一般的に「命題に対する話し手の心的態度を表す」と定義される。英語のモダリティ研究は“can”、“may”、“must”などの法（モダリティ）助動詞を中心に行われてきた。英語の法助動詞は大きく、命題の蓋然性に関する話し手の心的態度を表すepistemic modalityと、潜在的な出来事に対する文の主語の意思、義務や許可などを表すdeontic modalityの二義を持つ（黒滝2005：38）。また、英語の法助動詞の多義性にはpossibilityとnecessityという二つの概念が重要な役割を果たす。van der Auwera and Plungian (1998：80) は、モダリティを「可能性と必然性に基づくパラダイムを含む意味領域」と定義し、モダリティをepistemic modalityとNon-epistemic modalityに分け、更にNon-epistemic modalityをParticipant-external modalityとParticipant-internal modalityに分けている⁴。そのうち可能性に基づくものは表1のように構成される⁵。

▶4 表1のParticipant-internal possibilityは渋谷 (2005) の心情可能、能力可能、内的条件可能を含むと考えてよいだろう。また、Participant-external possibilityについては外的条件可能(状況可能)に対応すると考えてよいと思われる。ただし、日本語の可能表現は禁止用法への発展は見られるが、許可や依頼を表すことはそれほど多くない(渋谷2005：42)ため、正確にはNon-deontic participant-external possibilityに対応すると考えられる。

▶5 必然性 (necessity) に基づく意味地図と合わせて「モダリティの意味地図」となるが、今回は可能性 (possibility) に基づく部分だけを提示している。

■表1 可能性に基づくモダリティの分類 (van der Auwera and Plungian1998：82)

Possibility			
Non-epistemic possibility			Epistemic possibility (Uncertainty)
Participant-internal possibility (Dynamic possibility, Ability, Capacity)	Participant-external possibility		
	(Non-deontic possibility)	Deontic possibility (Permission)	

このモダリティの定義は比較的狭義のものであるが、モダリティとしての可能表現を分析する上では有効である。可能性に関わる法助動詞には“can”、“could”、“may”、“might”がある。以下では意味変化の過程とともに表1のそれぞれの意味を概観する。

“can”は古英語で“know how to”という意味の動詞“cunnan”から派生したものである (Goossens 1992)。Bybee et al. (1994) によると、可能の意味は可能となる条件が動作主の内部にある「心情可能 (=know how to)」を起源とし、やがて (4) のような身体的能力も表すようになり、(表1のParticipant-internal possibility、以下「内的条件可能」と呼ぶ)、更に (5) のように

可能となる条件が動作主外に帰するParticipant-external possibility (以下「外的条件可能」)へと変化した。これは(2)の分類とも共通している。

(4) I **can** lift this stone.

(5) To get to the station, you **can** take bus 66. (van der Auwera and Plungian1998: 80)

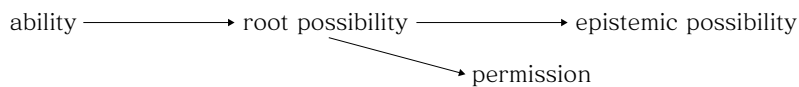
外的条件可能は「状況可能」とも呼ばれ、その下位分類としてDeontic possibility (義務的可能)がある。これは可能となる条件が権威のある個人や社会的規範に帰するもので、(6)のような許可の用法がある。許可は“can”だけではなく“may”によっても表される。“may”はもともと古英語の“have power to”という意味の動詞“mæg”から派生したもので、身体的能力を語源として、“can”と同様の意味変化の過程を辿ったとされている(Bybee et al. 1994: 193)。更に、状況可能は話し手の推量や判断を表すEpistemic possibility (「認識的可能」)へと発展する。(7)は客観的事実ではなく、話し手による推量を表す。

(6) You {**can/may**} leave now.

(7) John **may** have arrived. (van der Auwera and Plungian1998: 81)

以上のような意味変化は英語だけではなく、他の言語においても観察されるものである。Bybee et al. (1994)は、より多くの言語における同様の現象を研究し、言語普遍的にみられる可能表現の意味変化の流れとして、図1に示される「客観的なabilityから主観的なepistemic possibilityへ」という道筋を提示している。

■図1 A path to epistemic possibility (Bybee et al. 1994: 199)



Bybee et al. (1994)は、possibilityだけでなくモダリティ全体としてdeonticからepistemicへ文法化する一方向性を提示している。これに対し、黒滝(2005: 137)は日本語のモダリティはepistemic用法をプロトタイプとし、この一方向性の反例であるとしている。確かに、3.1で述べた日本語可能表現の「状況可能→能力可能」という意味変化の流れは、図1と相反するものである。

3.3 日英語可能表現の比較

3.1で見たように、日本語の可能表現はヴォイスの分野で扱われてきたが、日英語の可能表現の比較に関する先行研究は、概してモダリティの枠組みに基づくものが多い。

黒滝 (2013) は英語と日本語の可能表現の比較を通して「従来日本語のモ

ダリティ論では捉えられなかった可能をモダリティ表現として位置づけ（黒滝2013：313）、日本語のモダリティは状況可能、epistemic modality、epistemic evidentialityから成ると結論付けている。また、日本語のモダリティはepistemic modalityを基本としてそこから状況可能、evidential modalityへと発展しており、そこには事態の中に身を置いて話し手の見えの視点から事態を把握する主観的事態把握が反映されているとしている。

高橋（2011, 2012a, 2012b, 2013）では、日本語原作の小説『雪国』『伊豆の踊子』とその英訳における可能表現の対応関係を分析し、(8) のような結果を報告している。

- (8) ①日本語で可能表現が用いられ、英語でもcan/couldが対応している場合、過去形couldは、知覚動詞とともに用いられる場合や認識的用法を除く否定文が多く、特に過去に一回だけ実現した出来事を表す場合や、過去の能力について述べる場合は全て否定形である。
- ②日本語で可能表現が用いられ、英語では可能表現として訳されていない場合、過去に一回だけ実現した出来事を表す。
- ③英語でcan/couldがsee, hearなどの知覚動詞やunderstandなどの認識動詞とともに用いられている場合、状況的知覚可能性を表す。
- ④日本語の原文に可能表現がないのに、英語でcan/couldが用いられている場合、日本語では (i) 主観述語が用いられている場合、(ii) 「ある」「なる」による表現が用いられている場合、(iii) 意志・意図を表す表現が用いられている場合、(iv) 主観的判断文が用いられている場合、(v) モダリティ表現が省略されている場合、(vi) 結果状態を述べている場合、名詞表現が用いられそれを英語で言いかえている場合、語り手と登場人物の視点に違いがある場合がある。
- ⑤英語でcan/couldが用いられている場合、日本語では推量・推定を表す表現が多く、「かもしれない」「ようだ」「だろう」「きっと」「はずだ」「～とも聞こえる」「わけにもいかない」「そうだ」と対応している。このような日本語のモダリティは、蓋然性の高低を区別するのではなく、推量・推定に至った根拠やプロセスを示すことを中心としている。

更に、(8) のような特徴は、英語の客観的事態把握と日本語の主観的事態把握の反映であると結論付けている。

3.4 主観的事態異把握と客観的事態把握

池上（2004）は、英語は事態の外側から出来事を捉え、その中の個別の参与者に注目する客観的事態把握（「スル的」事態把握）を好むのに対し、日本語は事態の内部から出来事全体を描写する主観的事態把握（「ナル的」事態把握）を好むと述べている。この事態把握の違いは、特に認知言語学的アプローチによる研究において、各言語の様々なふるまいの違いに影響を与えていることが指摘されている。

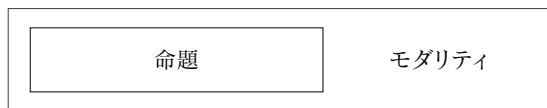
3.2で言及したように、黒滝（2013）は、日本語が主観的な事態把握を好むことから、日本語のモダリティはepistemic modalityをプロトタイプとし、そこから様々な周縁的モダリティが派生したと論じている。また高橋（2013：40-41）では、客観的事態把握の英語は命題を中心に文を構成し、命題に対する話者の態度を二次的に発話時に命題に付加するという方略を取るため、話者の命題に対する蓋然性判断を法助動詞によって示すのに対し、主観的事態把握の日本語は命題自体の存在が希薄で、命題の蓋然性の高低よりも、いかにその主観的判断をしたかという推量のプロセスや判断の根拠を示す方に関心が高く、「そうだ」「ようだ」「らしい」などの多様なモダリティ形式が存在すると述べている。

3.5 日本語のモダリティと可能の乖離

3.3、3.4で見たように、先行研究では日英語の可能表現の比較から、各言語におけるモダリティの特徴の違いが指摘されているが、日本語のモダリティ論に「可能」の概念を含める分析は、黒滝（2013）を除けば、筆者の知る限り見られない。以下では日本語のモダリティの基本的な枠組みについて述べる。

日本語の文の階層構造は、図2のように、モダリティが命題を包みこむ構造になっている。

■ 図2 日本語の文の構造（日本記述文法研究会2003：2）



加藤（2006：36）は日本語の助動詞をモダリティ助動詞と非モダリティ助動詞に分け、“られる”を非モダリティ助動詞に分類している。つまり、図2の構造のうち命題の内部に属する。一方、話し手による推量や判断を表すモダリティは、命題の外の階層に属する。日本語のモダリティの分類にも多くの研究があるが、日本記述文法研究会（2003）では、モダリティを4つのタイプに分け、①文の伝達的な表し分けを表すもの（表現類型のモダリティ）、②命題が表す事態のとらえ方を表すもの（評価のモダリティ・認識のモダリティ）、③文と先行文脈との関連付けを表すもの（説明のモダリティ）、④聞き手に対する伝え方を表すもの（伝達のモダリティ）を挙げている。しかし、これらの分類の中には、3.2で見たような英語のモダリティの分類の中心的なカテゴリーである内的条件可能、外的条件可能に当たるものは見当たらない。認識的可能は②認識のモダリティに相当し、蓋然性を表すものとして「かもしれない」「にちがいない」「はずだ」が挙げられているが、“える”“られる”“できる”“ことができる”という可能表現はどのタイプにも含まれていない。

黒滝（2013）のように、他言語との比較を通してそのモダリティの射程を問直すというアプローチは意義のあるものである。一方で、同じ意味を表す表現が、日本語と英語においてなぜ統語的に全く異なるカテゴリーに属する

のか、そして、日本語の可能表現に注目したとき、モダリティとしてではなく、そのヴォイスとしての側面は、可能の意味にとってどのような位置づけになるのか、という疑問が浮上する。そこで、本稿では、ヴォイス、モダリティといったカテゴリーに基づく分析ではなく、言語形式に基づき、各言語の代表的な可能表現形式がどのような意味を担っているのかを実際の使用例から観察することで、可能の意味にどのような側面があるのかをボトムアップ的に探っていく。

4 調査

本調査では、日本語の可能表現形式によって表される意味は、英語でどのように表されるのか、また、英語の可能表現形式で表される意味は、日本語でどのように表されるのかを調査するため、小説の原作とその翻訳をデータとし、収集された日英語の表現形式を観察する。

4.1 調査対象

高橋（2011, 2012a, 2012b, 2013）では、日本語の小説とその英訳をデータとしていたが、本調査では日本語原作の小説『キッチン』とその英語翻訳版“Kitchen”、及び英語原作の小説“*Harry Potter and Philosopher's Stone*”とその日本語翻訳版『ハリーポッターと賢者の石』をデータソースとした⁶。収集対象とした形式は日本語の“える”、“られる”、“できる”、“ことができる”、英語の“can”、“could”である。2作品×2言語の小説の本文中から、収集対象とした形式が用いられている文節を検索し、さらに、対応するもう一方の言語において用いられている表現形式を収集した⁷。

4.2 調査結果

データ収集の結果、『キッチン』と“Kitchen”からは164例、“Harry”と『ハリー』からは579例、計743の用例が収集された⁸。

(9)～(11)のように、一つの用例は対応する日英語の文節のセットから成るが、(9)のように両言語で収集対象とした可能形式が用いられている場合もあれば、(10)、(11)のように、どちらか一方でのみ対象形式が用いられている場合もある⁹。

- (9) a. そんなに寝ぼけてて包丁持てる？ (キッチン)
b. Do you think you can handle a knife? (Kitchen)
- (10) a. 取りに行ってくれてもいいわよ。(キッチン)
b. You can go pick it up if you like. (Kitchen)
- (11) a. クィレル先生は君から石を取り上げることができなかつた。(ハリー)

- ▶6 これ以降それぞれ『キッチン』、“Kitchen”、“Harry”、『ハリー』とする。
- ▶7 本稿では各表現がどのように翻訳されているかを調査することが目的ではなく、原作と翻訳のテキストデータを、あくまで同一の意味を表す、二言語における形式のペアとして扱い、パラレルコーパスデータのデータソースとして利用している。そのため、“Kitchen”における英語対象形式、『ハリー』における日本語対象形式も同様にデータとして含まれている。
- ▶8 ただし、手作業で収集したため、これらがデータ中のすべての用例であるという確証はないが、本調査では網羅的に収集することを目的にはしていない。
- ▶9 ただし、データは文学作品の翻訳であるため、必ずしも一句一句対応する形で翻訳されているとは限らず、文全体が意識されている場合も多い。そこで、今回は日英どちらの文でも同じ動詞が使用されている場合のみ収集対象とした。

b. Quirrell did not manage to take it from you. (Harry)

表2は、2作品×2言語、計4つデータから収集された各言語の対象形式の数である。

■表2 各小説から収集された各言語の対象形式数

日本語対象形式	キッチン	ハリー	合計
-られる	61	212	273
-える	41	85	126
-できる	13	64	77
ことができる	8	32	40
英語対象形式	<i>Kitchen</i>	<i>Harry</i>	合計
can	26	105	131
could	55	206	261

4.3 結果の分析

(9) のように両言語で可能形式が用いられているものは、743例中165例で、全体の22%であった。つまり、残りの578例では、どちらか一方の言語でのみ対象形式が用いられており、もう一方の言語では、対象形式以外の形式が対応しているということになる。ただし、そのうち206例は日本語の“られる”が受身用法として用いられている用例であった。受身用法を除いて考えると、両言語で対象形式が用いられている用例は、ほぼ半数を占める。第3節でみたように日英語の可能表現は統語上異なる特徴を持っているが、今回のデータの中で、受身以外の意味に関していえば、日英語の可能形式の表す意味のうち、重なる部分が半数を占めているということである。以下では、日英語の可能形式の表す意味が重ならない部分はどのような特徴があるのか、対象形式以外の表現形式に注目し、言語別に観察する。

4.3.1 英語の可能表現に対応する日本語の表現形式

表3は、英語で“can”、“could”が用いられている文節に対応する日本語の文節で用いられている表現形式の種類と用例数をまとめたものである。対象形式（“える”、“られる”“できる”、“ことができる”）以外に、39種類の表現形式が収集された。

■表3 “can”、“could”に対応する日本語の表現形式

No.	表現形式	用例数
1	見える／聞こえる／わかる	71
2	-える	65
3	動詞無標形	53
4	-できる	49
5	-られる	30
6	ことができる	22
7	とよい／ばよい	11
8	-てもよい	9
9	だろう	8
10	ありえる	5
11	はずだ	5
12	ことがある	4
13	-たらどう	4
14	-てはいけない／ならない	4
15	かもしれない	3
16	-そう	3
17	-たい	3
18	だめだ	3
19	ところだった	3
20	-てならない	3
21	(のは) 無理だ	3

No.	表現形式	用例数
22	わけにはいかない	3
23	-される	2
24	くれる	2
25	そこねる	2
26	-ている	2
27	-てくれる	2
28	とか	2
29	やすい	2
30	余裕がある	2
31	意向形 (-よう)	1
32	簡単にはいかない	1
33	じゃない	1
34	つもりがある	1
35	-て	1
36	-てくる	1
37	-てしまう	1
38	-てやる	1
39	に決まっている	1
40	にちがいない	1
41	ばかりだ	1
42	命令形	1
43	わけがない	1
合計		392

対象形式以外の39種類の表現形式には、以下の三つの特徴が観察される。
 一つ目に、(12)、(13)のように「とよい／ばよい」「たらどう」「てもよい」「ては」など、条件表現を含む表現が多く見られる。つまり、英語の“can”、“could”が表す意味には、条件節としての側面があるということである。

- (12) a. トランプで卵を賭けてもいいって。(ハリー)
 b. We could play cards. (Harry)
 (13) a. 何と説明すればよいかわからなかった。(ハリー)
 b. He wasn't sure how he could explain. (Harry)

二つ目に、「あり得る」「ことがある」「だろう」「はず」「かもしれない」「じゃない」「はず」「そう」「にちがいない」といった、モダリティ文末表現が多く見られる。これは高橋 (2013) の指摘に沿うものである。例として (14)、(15)を挙げる。

- (14) a. 殺されてたかもしれないのよ。(ハリー)
 b. You could have been killed. (Harry)

- (15) a. 埋められているのだらうか。(ハリー)
 b. Could there really be piles of wizard gold buried miles beneath them?
 (Harry)

ここから、英語の“can”、“could”が話し手の認識的モダリティを表すのに対し、日本語の可能表現には認識的モダリティの用法がなく、その他の文末形式が用いられるということがわかる。先行研究で言及した中井・呂(2014)では「～得る」のみを認識可能として日本語の可能表現の分類に加えていたが、認識可能という分類を立て、純粋に意味に基づくカテゴリーとして可能表現を定義するのであれば、「～得る」以外にも、多くの形式が可能表現として含められるということになる。

三つ目に、(16)、(17)のような「てもいい」「てはいけない」や、「わけにはいかない」など、許可を表す形式が見られる。

- (16) a. マントも持っていい。(ハリー)
 b. You can take the Cloak. (Harry)
 (17) a. 外に出てはいけないよ。(ハリー)
 b. You can't go out. (Harry)

これらは“can”、“could”の持つ義務的モダリティの意味を表している。日本語の可能表現にも、例えば「ここは駐車できません」のように許可を表す機能があるとも考えられるが、このような用法は直接聞き手の行動を制御する表現というよりは、その場の状況における可能・不可能を描写することで、聞き手によるその行動の実現を制御するといった、語用論的な意味として解釈するほうが適切であると思われる。したがって、英語の“can”、“could”がもつ義務的モダリティの意味も、日本語では主に可能表現以外の形式によって表されるといえる。

4.3.2 日本語の可能表現に対応する英語の表現形式

次に、日本語の可能表現に対応する英語の表現形式を観察する。表4は、日本語で“える”、“られる”、“できる”、“ことができる”が用いられている文節に対応する英語の文節において用いられている形式の種類と用例数をまとめたものである。対象形式の“can”、“could”以外に、33種類の表現形式が収集された。

■表4 “える”、“られる”“できる”、“ことができる”に対応する英語の表現形式

No.	表現形式	用例数	No.	表現形式	用例数
1	could	103	17	let X～	3
2	can	62	18	too形容詞to	3
3	be + 過去分詞	93	19	be supposed to	2
4	動詞無標形式	122	20	be ready to	2
	主語の交替あり	82	21	stop X from -ing	2
	主語の交替なし	26	22	to	2
	seem/look/appear	9	23	allow X to	1
	get	5	24	be going to	1
5	過去分詞	25	25	be -ing	1
6	be able to	17	26	be to	1
7	would	11	27	have chance	1
8	will	10	28	lack energy to	1
9	have + 過去分詞	8	29	fail to	1
10	easy/difficult	7	30	get to	1
11	possible/impossible	6	31	have to	1
12	-ble	5	32	never	1
13	dare to	5	33	there is no -ing	1
14	enough to	5	34	powerless to	1
15	get + 過去分詞	5	35	have trouble	1
16	manage to	5		合計	516

表4に挙げられている対象形式以外の表現形式には、以下の四つの特徴が見られる。

一つ目に、“easy/difficult”、“enough”、“ready”、“powerless”、“too形容詞to”のような形容詞文や、“have energy”、“have trouble/chance”といった“have”を用いた表現が多く見られる。(18)は“easy”、(19)は“have chance”の例である。

- (18) a. 彼の泊っている宿は、夜中に生やさしく入れるような古い造りではなかった。(キッチン)
 b. The inn where Yuichi was staying was not the old-fashioned kind, which would have been easy to get into in the middle of the night. (Kitchen)
- (19) a. それ以上何の推測もできなかった。(ハリー)
 b. [...] they didn't have much chance of guessing what it was without further clues. (Harry)

これらの例から、日本語の可能表現は、動作主の持つ力について述べるというよりも、話し手の周囲に広がる状態を描写するという特徴が強いと解釈できる。

二つ目に、(20) のように “let” を用いた表現が3例見られた。

- (20) a. だが、ダンブルドアが、俺を森の番人としてホグワーツにいられ
るようにしてくださった。(ハリー)
b. But Dumbledore let me stay on as gamekeeper. (Harry)

この例を見ると、英語では動作を可能とさせる主体の方を主語とする使役構文が使用されるのに対し、日本語では受け手である話し手の視点から、「ある状況が可能になった」と述べる傾向にあると言える。つまり、日本語は動作主への注目が強くなく、話し手の視点からその状況を描写する傾向があると言える。

三つ目に、(21) のように、過去のある時点の能力を表す場合、“be able to” が使用され、(22) のように、過去における行為の実現を表す場合、“manage” が使用されている。

- (21) a. そういったものを作れるようになるまでにはかなりかかった。(キッチン)
b. [...] it took a fair amount of work to be able to make those things.
(Kitchen)
(22) a. コンクリの上へころがり込むことができた。(キッチン)
b. I managed to roll myself onto the roof. (Kitchen)

これらは、過去における状態や、実際に実現した行為であり、行為の達成を表す。つまり、日本語の可能表現は属性可能や行為の達成など、客観的事実としての可能を表すことができるのに対し、“can”、“could” は客観的事実の描写はできず、代わりに “be able to” や “manage” が用いられる。

四つ目に、(23)、(24) のように “dare”、“will” などの主体の意志を表す表現が見られる。高橋 (2013) も意志表現との関係に言及しているが、報告されている例は「のだ」のみである。

- (23) a. 学校にだけはさすがに手出しができんかった。(ハリー)
b. Didn't dare try takin' the school, not jus' then, anyway. (Harry)
(24) a. 捕まえられる。(ハリー)
b. We'll catch them. (Harry)

法助動詞は、これからある行為につながる効力について述べるものであるため、もともと力動的であり、また未来志向的である (Langacker 2008 : 304、邦訳 : 394)。英語において、未来の行為に向かう力動性が知覚された場合、その力の源となる動作主体を主語として、その主体の意志的な行為として表現する傾向にある。一方日本語では、すでに述べたように、動作主体に注目するよりも、話し手が置かれた状況の描写として表す傾向にある。つまり、英語では動作主の意志による行為の実現可能性として表されるものが、

日本語では、話し手が置かれた状況下における、行為の実現可能性として表されると解釈できる。

5 考察

前節における分析をまとめると、英語の“can”、“could”に対応する日本語の形式のうち、“られる”“れる”“できる”“ことができる”以外の形式には、①条件表現を含む形式、②話し手の推量などを表す文末モダリティ形式、③許可や義務を表す形式が見られた。一方、日本語の“られる”“れる”“できる”“ことができる”に対応する英語の形式のうち、“can”、“could”以外の形式には、①形容詞やhave構文など、状況を描写する表現、②使役構文、③ある時点における能力や、実現可能などの客観的事実としての可能、④主体の意志を表す表現が見られた。以下では、これらの特徴が、ヴォイスとしての可能表現と、モダリティとしての可能表現という性格の違いにどのように関係するかをLangackerの認知文法におけるグラウンディング、及び池上（2004）の主観的／客観的事態把握の観点から論じる。

5.1 モダリティとしての可能

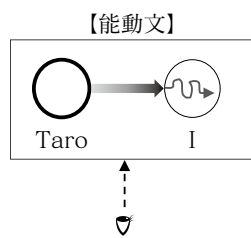
Langackerの認知文法において、法助動詞は節のグラウンディングに関わるグラウンディング要素として挙げられている。節のグラウンディングとは、「事態が起こったかどうか」という事象の存在について述べることである。より具体的には、プロファイルされた（認知的な際立ちが与えられた）事態の生起が今現在の即時的現実として位置づけられるのか、把握・想起された現実 (Rc) として位置づけられるのか、それとも非現実として位置づけられるのか、といった、事象の位置づけを表す (Langacker 2008: 296-304, 邦訳: 382-394)。その中で法助動詞は、現実／非現実の位置づけに関わり、「法助動詞はプロファイルされたプロセスを想起された現実の外部に留め置くもので、ある領界においてそれを非現実 (unreal) として参照することができる (Rcの補部)。法助動詞によってグラウンディングされたプロセスは、概念化者には現実として受け入れられているものではないので、非現実的であると言われる (Langacker 2008: 302, 邦訳: 391)」。従って、法助動詞を用いるということは、本質的に事態を非現実として捉えるということである。これは、英語の“can”、“could”に対応する日本語の表現形式に条件節が多く見られたことを説明できる。日本語には英語のように節のグラウンディングに関わる法助動詞がないため、英語の法助動詞が表す非現実性を、条件節を用いて表すのである。また英語の法助動詞はグラウンディング要素であるがゆえ、命題内の客観的事実としての能力や行為の実現などを表すことはできない。

5.2 ヴォイスとしての可能

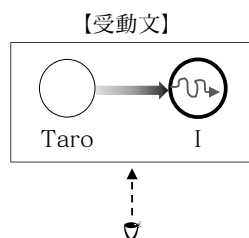
3.5で述べたように日本語の可能表現は命題内部に属する要素である。したがって、英語の“can”、“could”では表されない実現可能や、属性の描写など、命題内の可能も表す。また、日本語の“られる”はすでに述べたように、可能の他、受身の用を持つ。今回のデータでも、“られる”の用例273のうち206例が受身の用例であった。

日本語の受身と英語の受身について、荒川・森山(2009)は、日英語の事態把握の点から比較している。荒川・森山(2009)によると、英語は池上(2004)が述べるように客観的事態把握の言語であり、話し手が関わる事態であっても、常に客観的な視点で言語化を行う。そのため、受身文は第一の際立ちを動作主から被動作主に移すことで起きる。(以下の図3~8は荒川・森山(2009:106)を筆者が一部修正して作成した。)

■ 図3 Taro punched me.

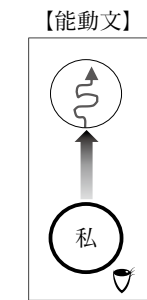


■ 図4 I was punched by Taro.



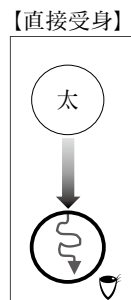
一方、日本語の受身は非情の受身を除き、人（特に話し手や話し手が心を寄せた人物）が主語になることが多く、迷惑や被害の気持ちを伴うことが多いという特徴があるが、これは図5、6のように、日本語が話し手からの見えを言語化した主観的把握型の言語であることが関係している（荒川・森山2009:105）。日本語は常に話し手の視点から事態を把握するため、図7、図8のように、何らかの迷惑や被害を被った話し手の視点から、その事態に対する気持ちや状態を描写する間接受身の用法が存在する。

■ 図5



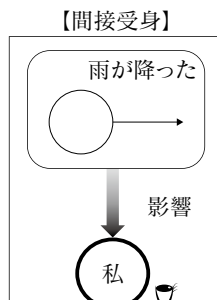
太郎を殴った。

■ 図6



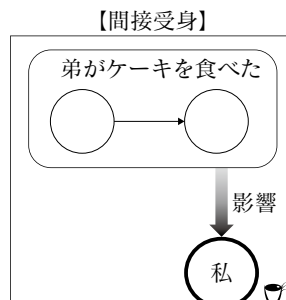
太郎に殴られた。

■ 図7



雨に降られた。

■ 図8



弟にケーキを食べられた。

日本語の可能表現にも、この主観的事態把握の視点が埋め込まれており、

話し手が置かれた状況を話し手の視点から描写することを基本としていると考えられる。一方、英語ではそのような場合は可能表現ではなく、形容詞文や所有構文が用いられる。これは、日本語の可能表現に対応する英語の形式に形容詞文やhave構文が多く見られたことを説明できる。また、英語では事態の中の力動関係に注目し、力動性の源になるものが主語として選択される。そのため、日本語では状況可能として捉えられるものが、英語では使役構文や意志表現として力動的に捉えられ、日本語の可能表現に対応する形式として使役構文や意志表現が見られると考えられる。

6 結論と課題

前節では本調査で収集された日英語の可能表現に観察された特徴を、グラウンディングと日英語の事態把握という観点から説明した。また、従来モダリティの枠組みからなされてきた日英語の可能表現の比較について、ヴォイスとしての特徴からの考察を加えた。以下に本研究の結論をまとめる。

まず、主観的事態把握を好む日本語において、可能表現もそれを反映し、話し手の視点から周囲の状況を描写するという傾向がある。そのため、日本語の可能表現に対応する英語の形式には形容詞文やhave構文が多く見られる。また、使役構文や意志表現に対応する場合も見られるが、これは客観的事態把握を好む英語においては、力動性の源である動作主を主語として捉え表出するためである。一方、英語の法助動詞“can”、“could”は、グラウンディング要素であり、本質的に非現実を表す。そのため、英語の可能表現に対応する日本語の形式には、非現実を表す条件表現が多く見られる。日本語の事態把握は、話し手が直接体験する気持ちや感覚といった現実的な性格が強く、命題内の要素である受身などのヴォイス構文できえ、話し手と事態との主観的な関係を帯びる。つまり、可能の概念には、「話し手と事態との主観的なつながり」が含まれており、それを日本語ではヴォイス構文として中心的に捉え、英語では認識的モダリティとして周辺的に捉えていると考えられる。一方で、可能の概念には「非現実」的側面もあり、英語の助動詞はその側面を中心的に捉え、事態を非現実として位置づけることを中心的な機能とするのに対し、日本語では様々な条件表現を含む表現によって表されることが考えられる。

本研究は限られたデータからの考察であり、日本語一般の特徴として主張することはできないが、日本語の可能表現が主観的事態把握としての特徴を反映していることは中村（2009）などにも指摘があり、本稿の結論はそれを支持するものである。ただし、今回の調査では可能表現に関わる形式を網羅的にリストアップすることを目的としたわけではなく、ケーススタディとして、限られたデータから読み取れる傾向を報告したものの、やはり、データの量と質には問題が残る。データを増やせばそれだけ収集される形式も増加するうえ、文学作品の翻訳という性格上、翻訳者によって対応する形式が異なる

可能性がある。今後、小説以外のテキストデータや話し言葉のデータに基づく調査、また、日本語、英語以外の言語を取り入れた調査を行う必要がある。

謝辞

本稿の執筆にあたり、指導教員の飯田真紀先生、日頃ご指導くださっている佐藤俊一先生、そして、多くの有益なご指摘、ご助言をくださった査読者の方々に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- 青木伶子 (1980) 「可能表現」『国語学大辞典』東京堂出版, pp.169-171.
- 荒川洋平・森山新 (2009) 『日本語教師のための応用認知言語学』凡人社
- Bybee Joan L., Revere Dale Perkins and William Pagliuca. (1994). *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. University of Chicago Press.
- Goossens, Louise. (1992) CUNNAN, CONNE(N), CAN: The Development of a Radial Category. In Kellermann, Günter and Michael D. Morrissey (eds.), *Diachrony within Synchrony- Language History and Cognition: Papers from the International Symposium at the University of Duisburg*, Peter Lang Pub Inc, pp.377-394.
- 池上嘉彦 (2004) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (2)」山梨正明 (編) 『認知言語学論考No.4』ひつじ書房, pp.1-50.
- 加藤重広 (2006) 『日本語文法入門ハンドブック』研究社
- 黒滝真理子 (2005) 『DeonticからEpistemicへの普遍性と相対性—モダリティの日英語対照研究—』くろしお出版
- 黒滝真理子 (2013) 「日英語の事態把握と間主観的モダリティ: Potentiality, 状況可能と Evidential Modalityの観点から」山梨正明 (編) 『認知言語学論考No.11』ひつじ書房, pp.313-345.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press (邦訳: 山梨正明 (編訳) (2011) 『認知文法論序説』研究社)
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法4 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版
- 中井政喜・呂雷寧 (2014) 「日本語における可能の意味について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』47, pp.1-12.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」坪本篤郎・早瀬尚子・和田尚明 (編) 『「内」と「外」の言語学』開拓社, pp.353-393.
- Shibatani, Masayoshi. (1985) Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis. *Language* 61(4), pp.821-848.
- 渋谷勝己 (1993) 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33 (1), pp.1-262.
- 渋谷勝己 (2005) 「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』1 (3), pp.32-45.
- 高橋正 (2011) 「モダリティ表現の日英語対照研究 (3) 日本語の能力・可能表現と CAN/COULDの対応」『英語英文学研究』36 (1), pp.1-30.
- 高橋正 (2012a) 「モダリティ表現の日英語対照研究 (4) 知覚動詞とCAN/COULD」『英語英文学研究』36 (2), pp.1-32.
- 高橋正 (2012b) 「モダリティ表現の日英語対照研究 (5) 日本語で能力・可能表現のない場合のCAN/COULDの出現とその分析」『英語英文学研究』37 (1), pp.17-40.
- 高橋正 (2013) 「モダリティ表現の日英語対照研究 (6): 可能性を表すcan/couldはどのような日本語表現と対応しているか?」『英語英文学研究』37 (2), pp.19-42.

van der Auwera, Johan. and Vladimir A. Plungian. (1998) Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology* 2, pp.79-124.

Wierzbicka, Anna. (1996) *Semantics: Primes and Universals*. Oxford University Press

データ出典

吉本ばなな (1988) 『キッチン』 角川文庫

英語翻訳版：Megan Backus (訳) (1993) *KITCHEN*. faber and faber

Rowling, Joanne K. (1997) *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. Bloomsbury

日本語翻訳版：松岡佑子 (訳) (1999) 『ハリーポッターと賢者の石』 静山社

(平成30年4月16日受理、平成30年7月7日採択)

